

古代エジプト古王国時代末期から中王国時代における 器物奉獻儀礼の構造と変化

— エジプト学における儀礼研究の可能性 —

山崎 世理愛

はじめに

本論は、ヘイズ (H. Hays) によるエジプト学における儀礼研究の方法論的提唱を出発点とし、古代エジプト中王国時代以降に本格的に執行されるようになる器物奉獻儀礼の構造と、その通時的变化を明らかにすることを目的とする。従来、エジプト学における儀礼研究は、主としてテキストに基づく宗教的意味の解釈に重点が置かれてきた。しかし、儀礼は単なる観念的営みではなく、具体的な行為の連鎖として理解されるべきものであり、その構造的変化を把握することによって初めて、より実態に即した説明が可能となる。

具体的には、器物奉獻儀礼に関わる図像資料や考古資料を用いて、可能な限り各時期の儀礼の構成要素と手順を可視化し、時期ごとに比較することで儀礼を規定する規則の抽出を試みる。こうした分析を通じて、儀礼構造の変化を具体的に説明するとともに、ヘイズが提唱する方法論の可能性と限界を検討することも本論の課題である。

1. ヘイズによるリチュアル・シンタククス理論を援用した方法論の提唱

古代エジプトの儀礼に関する研究の多くは、テキストや図像資料をもとに特定の儀礼の宗教的背景に迫るもので、儀礼の構成や手順についてはあまり注目されてこなかった⁽¹⁾。儀礼の構造については、一部の研究者が通過儀礼モデルを援用した説明を試みてきた。たとえば、ウィレムス (H. Willems) は、中王国時代の箱形棺に記されたコフィン・テキストと呼ばれる葬祭文書に見られる死者の来世への道のりがヘネップやリーチの通過儀礼モデルに当てはまると指摘している⁽²⁾。具体的には、神々による審判とヌト女神の門の通過 (=分離)、多様な危険に直面し、来

(1) 例外的な研究として、Geisen 2018は *Ramesseum Dramatic Papyrus* にもとづき、亡き王の彫像に対して行われた一連の儀礼を詳細に復元している。同研究では、とりわけパピルスに記されたテキストの精緻な解読を通じて、儀礼の手順が明らかにされている。一方で、他の儀礼との比較も行われているものの、その主眼は対象とする儀礼が既知の他の儀礼とは異なることを示す点にあり、儀礼を規定する規則を抽出し、その構造を明らかにすることを目的としたアプローチではない。

(2) Willems 1996: 380-382.

世の社会ネットワークに居場所はなく通常の世界とは真逆の秩序で死者はその修復を試みる一種の試練的な段階（＝境界）、あちら側へ渡る許可を得て審判で自身の正当性を主張し王冠と新たな地位を獲得する段階（＝統合）という三段階で構成されているという。また、通過儀礼モデルに直接的に言及しているわけではないが、クーニー（K. Cooney）は、古代エジプトでは女性も男神と同一化しなければならないため、死後は棺を媒体として一度男性化したという。しかし永遠に男性となるわけではなく、一度男神と同一化した後は、生前の性別に戻る⁽³⁾。言い換えれば、「死→男神化→もとの人物への回帰」という三段階のプロセスを経て来世へ進むということである。

通過儀礼モデルを用いた説明を除くと、儀礼の構造やその変化について説明がなされることが稀有であるエジプト学の儀礼研究に対して、ヘイズは、2013 'The End of Rites of Passage and a Start with Ritual Syntax in Ancient Egypt', *RSO Supplemento* 2: 165-186. において示唆的な展望を掲げている。ヘイズはこの論考において儀礼の構造に焦点を当て、通過儀礼モデルとリチュアル・シンタックス理論という2つのアプローチ方法を古代エジプトの儀礼分析に適用し検証している。双方ともに限界と強みがあるとしているものの、実際には通過儀礼モデルを痛烈に批判している。ヘイズによると、通過儀礼モデルを用いれば心地よいストーリーを作ることができ、満足のいく解釈を与えられるが、これはこのモデルの限界でもあるという。というのも、通過儀礼モデルはそれ自体が西洋の美的感覚すなわち心地よいストーリーへの欲求を満たすもので普遍的ではなく、予め決められた非ネイティブの構造を、まったく異なる方法で組織化された一連の出来事に無理やり重ね合わせているからであると説明している⁽⁴⁾。彼は実際に新王国時代の墓の壁画に描かれた儀礼を分析し、そもそも古代エジプトの儀礼は通過儀礼モデルには当てはまらないとした。古代エジプトの葬送儀礼は多くの手順によって構成されており、通過儀礼モデルはそれらがどう三段階に当てはまるか説明できていないと言うのである⁽⁵⁾。このように、ヘイズは通過儀礼モデルを古代エジプトの儀礼に適用することはできないと主張し、今後はスタール（F. Staal）によるリチュアル・シンタックス理論（Ritual Syntax）が有用ではないかと提唱した。

(3) Cooney 2010: 226.

(4) Hays 2013: 170.

(5) このヘイズによる分析と指摘には疑問が残る。彼はリチュアル・シンタックス理論を念頭に置いているためか、儀礼の細かな手順に着目している。Hays 2013: 175において、ヘイズは新王国時代の墓の壁画に表された葬送儀礼を大きく8つの手順に区分することで、通過儀礼モデルが示す三段階には当てはまらないと指摘する。しかし、通過儀礼モデルは特定の儀礼が3つの「手順」から構成されることを意味するのではなく、三段階の構造的枠組みを提示するものである。したがって、通過儀礼モデルとリチュアル・シンタックス理論は分析の焦点が異なるのであって、必ずしも競合関係にあるわけではないと考える。実際、上述したウィレムスによる研究のように、古代エジプトの儀礼を通過儀礼モデルに当てはめること自体は可能であると考えられる。本論はヘイズの提唱を基盤としているものの、彼のように通過儀礼モデルの援用を批判する意図は含んでいない。

スタールのリチュアル・シンタックス理論とは、儀礼を構造化する規則について言語学における方法や前提を用いて明らかにするというもので、儀礼が伝達する意味の解釈ではなく、儀礼の構造を解明することを目的としている。言語学者チョムスキー（N. Chomsky）の「生成文法」理論に強く影響を受け、深層構造（deep structure）から、変換や再帰などの規則を適用することで、表層構造（surface structure）が形成され言語表現が生まれる、という前提をもとに儀礼が研究された⁽⁶⁾。スタールは、とくに儀礼の意味論的な解釈に否定的な考えをもち、それまでの主観的で意味論的な儀礼の解釈ではなく、儀礼の統語論的な規則を分析することで、儀礼をはじめ「説明」することができるとした⁽⁷⁾。

ヘイズは、まずスタールのリチュアル・シンタックス理論をいかに古代エジプトの儀礼研究に用いるかを検討し⁽⁸⁾、深層構造の概念を適用すると結局のところ意味論になってしまうのではないかと考えた⁽⁹⁾。そこで深層構造という概念の適用はあえて避け、スタールの研究を部分的に用いて古代エジプトの儀礼を分析することを提唱した。具体的には、「同一の文化に属する2つの似通った儀礼を取り上げる→両者の共通点と相違点を抽出する→深層構造という概念には縛られず両者のちがいを生み出す規則を探し出す」という方法である。ヘイズによると、通過儀礼モデルでは予め用意されたパターンに当てはまるかどうか焦点が当てられていたが、リチュアル・シンタックス理論ではそういった予想は全くせず、その儀礼固有の規則や関係性を解明することになる。特定の規則とはちがいの説明であり、それはつまり儀礼がどのように構造化されているのかを説明することと同義であるという。儀礼の内容を示す文字資料が豊富にあることから、ヘイズはこの方法こそ古代エジプトの儀礼研究において有用性が高いと主張している。

2. 器物奉獻儀礼の概要と本論の位置付け

(1) 儀礼の種類と執行方法の変遷

古代エジプトの供物奉獻儀礼で捧げられる供物は、食糧と食糧以外の器物に分けられる。前者は死者が来世で永遠に生き続けられるように捧げられた一方、後者は死者を神化し再生復活させる役割をもつ。本論では、古王国時代に由来し中王国時代から本格的に行われるようになる器物奉獻儀礼を対象とする。器物奉獻儀礼はその起源や捧げられる器物供物の種類によって、「私的

(6) ベル 2017: 140.

(7) e.g. Staal 1979, 1990.

(8) スタールによるリチュアル・シンタックス理論の検討については、とくに Hays 2013: 178-180を参照。

(9) Hays 2013: 180によると、スタールのリチュアル・シンタックス理論では深層構造はいかなる規則が適用される前に獲得されていなければならない。言語であれば、話し言葉や書き言葉に先立って原型となる意味を特定することが可能であるが、儀礼の分析においては困難である。生成文法において、深層構造の概念が考えうる言語表現の意味論であるならば、それを儀礼に置き換えることはおそらくできない。生成文法を前提とする場合には、深層構造がもつ非現実的側面からは逃れられないと述べている。

器物奉献儀礼」「王族の器物奉献儀礼」「王権の象徴奉献儀礼」の3種類に分けられる⁽¹⁰⁾。後者2種類は古王国時代末期の王族のピラミッド内部に記されたピラミッド・テキストに由来する。このうち「王族の器物奉献儀礼」はさらに王族の衣装供物・武器供物・杖類供物に細分され、この区分は実際のピラミッド・テキストにおけるリストの記載方法に対応していることから⁽¹¹⁾、当時の分類認識に沿っていると考えられる。

器物奉献儀礼は、中王国時代にはおもに箱形棺内面にオブジェクト・フリーズと呼ばれる装飾帯⁽¹²⁾として描かれ執行されたほか、実物が埋葬室内へ配列された例もあるが、こうした儀礼の執行方法には時期的な変遷が見られる。というのも、中王国時代初頭は第1段階のオブジェクト・フリーズ⁽¹³⁾、アメンエムハト2世治世以降にはより発展した第2段階のオブジェクト・フリーズで器物奉献儀礼は執行されたが、中王国時代後期（センウセレト3世治世以降）にはほとんどの棺からオブジェクト・フリーズは姿を消し、代わりに実物を用いた器物奉献儀礼が執行されるようになるのである。つまり、古代エジプトにおける器物奉献儀礼の執行方法は、古王国時代末期のピラミッド・テキスト→中王国時代初頭のオブジェクト・フリーズ第1段階→アメンエムハト2世治世以降のオブジェクト・フリーズ第2段階→中王国時代後期（センウセレト3世治世～）の実物を用いた執行というように変遷するとと言える。

(2) 本論の位置付け

上述のように、器物奉献儀礼が執行された方法の変遷は判明しているが、各時期における儀礼の構成や手順、そして構造が具体的にどのように変化しているのかは未だ不明瞭である。筆者は、山崎 2022で中王国時代における器物奉献儀礼の変化を分析するため、オブジェクト・フリーズに描かれた各儀礼および各器物の出現頻度を調べた。その結果、器物奉献儀礼を構成する3種類の儀礼のうち、「王権の象徴奉献儀礼」はオブジェクト・フリーズではほぼ執行されることはなく、中部エジプトの一部でのみ取り入れられていたことが判明した⁽¹⁴⁾。また、実物を用いた器物奉献儀礼とオブジェクト・フリーズを比較した結果、「私的器物奉献儀礼」と「王族の器物奉献儀礼」

(10) ここでは紙幅の関係上各儀礼で用いられる器物供物をすべて列挙することはしないが、「私的器物奉献儀礼」では襟飾り等の装身具が主要な供物として挙げられ、「王族の器物奉献儀礼」に関しては王の衣装や王が手に持つような杖や笏、武器、そして「王権の象徴奉献儀礼」には王冠やコブラ、ハゲワシといった王権のシンボルが含まれる。各儀礼に含まれる器物の詳細は山崎 2022の図2を参照されたい。

(11) Jéquier 1933: pl. XIIを見ると衣装供物を示した行と杖類供物を示した行で枠の大きさに違いが見られ（Willems 1988: 227）、王族の武器供物に関してもひとまとまりで記されていることが分かる。

(12) 被葬者に捧げるべき様々な器物の図像とそれらの名称や素材、配置場所等を記した文字ラベルからなる装飾帯である（e.g. 山崎 2021, 図1）。

(13) 箱形棺の内面装飾は、胸側面にオブジェクト・フリーズが描かれないタイプ1と全側面（頭・足・背・胸側面）に描かれるタイプ2に分けられる（Willems 1988: 179-191）。本論では時期差を明確に示すため「第1段階」「第2段階」と呼称する。

(14) 山崎 2022: 3-8.

が中王国時代における主要な器物奉獻儀礼であり、当時の社会的要求に応じるかたちで実物を用いた儀礼へと変化していった可能性を指摘した⁽¹⁵⁾。しかし、器物奉獻儀礼の構造に注目した分析は行っておらず、当該儀礼全体を踏まえた説明ができていない。そこで本論では、ヘイズによる提唱を念頭に置き、器物奉獻儀礼の構造とその変化を検討することで改めてこの儀礼の変遷を辿りたい。儀礼とはその時々々の社会的要求に応じて常に変化していくため、「似通った儀礼を取り上げ共通点と相違点を抽出し、両者のちがいを生み出す規則を探し出す」というヘイズによるリチュアル・シンタックス理論を部分的に用いた方法は、特定の儀礼の通時的分析において有用である。具体的には、山崎 2022で行った分析結果を基盤とし、各時期の器物奉獻儀礼の構造について、儀礼の構成や手順を可視化することによって、時期ごとの儀礼構造の差異とそれを生み出す規則を明らかにする。

しかしながら、Hays 2013によるエジプト学における儀礼研究の新たな方法論の提唱においては、専らテキストの分析が重視されており、オブジェクト・フリーズに見られる文字ラベルのような断片的なテキストや図像表現、さらには考古資料の取り扱いについては十分に論じられていない。リチュアル・シンタックス理論を（部分的に）適用するには、儀礼の手順を詳細に記したテキストが不可欠であるが、本論で扱う資料群はその要件を完全には満たさない。そのため、本論はヘイズの提唱を参照しつつも、とくに儀礼の手順に関しては現存資料の範囲で復元可能な水準に留めることとする。そして、ヘイズによる方法論の可能性と限界を検討し、今後の展望を提示することを目的の一つとする。

3. 各時期における器物奉獻儀礼の構造

(1) 古王国時代末期のピラミッド・テキストにおける儀礼構造

まず、古王国時代第6王朝のピラミッド・テキストに記された器物奉獻儀礼の構造を分析する。ピラミッド・テキストは複数の王族のピラミッド内部に見られるが、残存状況はそれぞれ異なる。本論で対象とする器物奉獻儀礼に関わるリスト部分が残存しているのは、おもにペピ2世とネイト王妃のピラミッドであり、「王権の象徴奉獻儀礼」と「王族の器物奉獻儀礼」の起源となったリストが残されている⁽¹⁶⁾。

ピラミッド・テキストのリストに記された器物の順序等を踏まえて当該期における儀礼の構成と手順を可視化すると図1のようになる。まず、ピラミッド・テキストでは「王権の象徴奉獻儀礼」に関する呪文（PT Utt. 742-756）の後に「王族の器物奉獻儀礼」に関するリストが配されており⁽¹⁷⁾、儀礼の手順としては最初に王権の象徴が捧げられたと捉えられる。図1における「王

(15) より具体的な議論は山崎 2022: 11-14を参照されたい。

(16) Jéquier 1933: pl. VIII, XII; Jéquier 1936: pl. IV; Willems 1988: 206; Allen 2005: 318.

(17) Willems 1988: 206.

族の器物奉獻儀礼」の杖類供物の奉獻順序は比較的残存状況が良好なネイト王妃のピラミッド・テキストをもとにしており、穀竿やベジュアハと呼ばれる屈曲した杖などが最後の方で捧げられる手順となっている。なお、ピラミッド・テキストはオブジェクト・フリーズとは異なり器物の図像表現はなされないため、どのような器物を示しているのか判断が難しい名称もある。そこで、図1ではピラミッド・テキストのリストに記された器物の名称に見られる決定詞を参照したりオブジェクト・フリーズにおける器物の名称と照合して復元できる範囲に留めている。武器供物に関しては、ペピ2世のピラミッド・テキストでは杖類供物の後に、ネイト王妃のピラミッド・テキストでは衣装供物の前に記されているため⁽¹⁸⁾ここでは「順序不明瞭」とした。

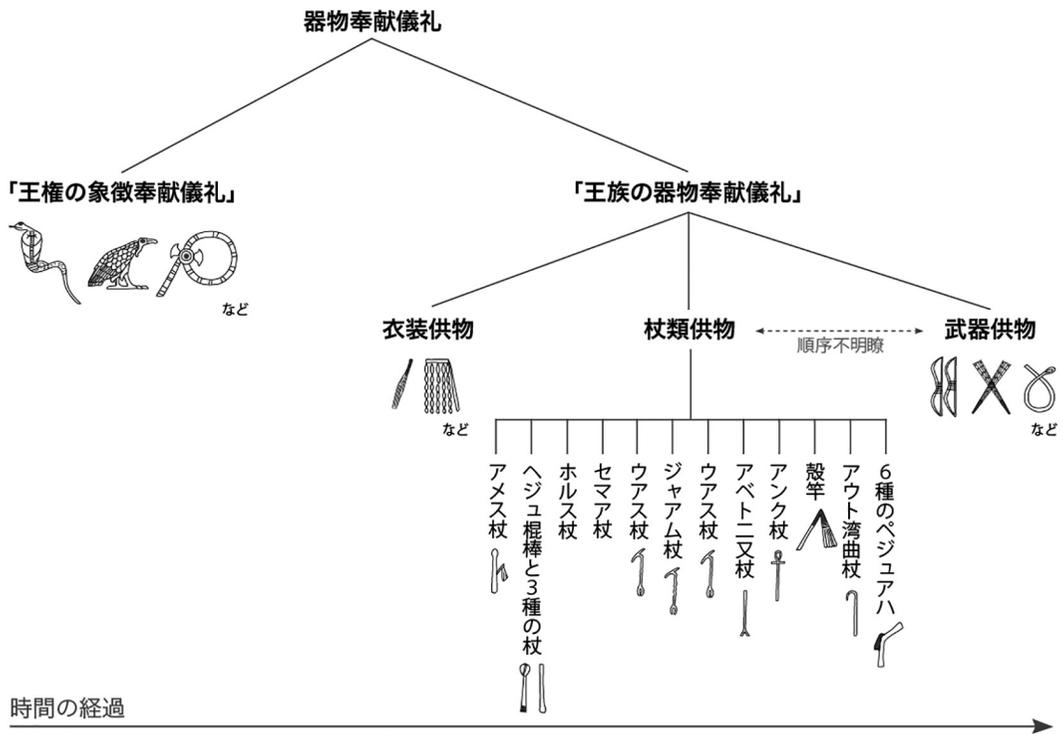


図1. 古王国時代のピラミッド・テキストにおける器物奉獻儀礼の構造

(2) オブジェクト・フリーズ第1段階における儀礼構造

続いて中王国時代初頭のオブジェクト・フリーズ第1段階における器物奉獻儀礼の構成と手順を検討する。図2に示した遺跡出土の中王国時代初頭からアメンエムハト2世治世よりも前に年代付けられるオブジェクト・フリーズが確認された56点の棺を対象に、それらに描かれた器物の

(18) Jéquier 1933: pl. XII; Jéquier 1936: pl. IV; Willems 1988: 227, n.207.

古代エジプト古王国時代末から中王国時代における器物奉獻儀礼の構造と変化

種類と配列を分析した⁽¹⁹⁾。オブジェクト・フリーズは、死者に捧げる器物がランダムに描かれているわけではなく、器物を死者に捧げる儀式的な行為自体を表現していたと言われる⁽²⁰⁾。オブジェクト・フリーズは単なる器物の羅列ではなく、一つの「文書、記録 (“document”）」として捉えるべきとされていることから⁽²¹⁾、そこに描かれた器物の配列は器物奉獻儀礼の手順と密接に関わると考えられる。したがって、ここではオブジェクト・フリーズに描かれた器物の配

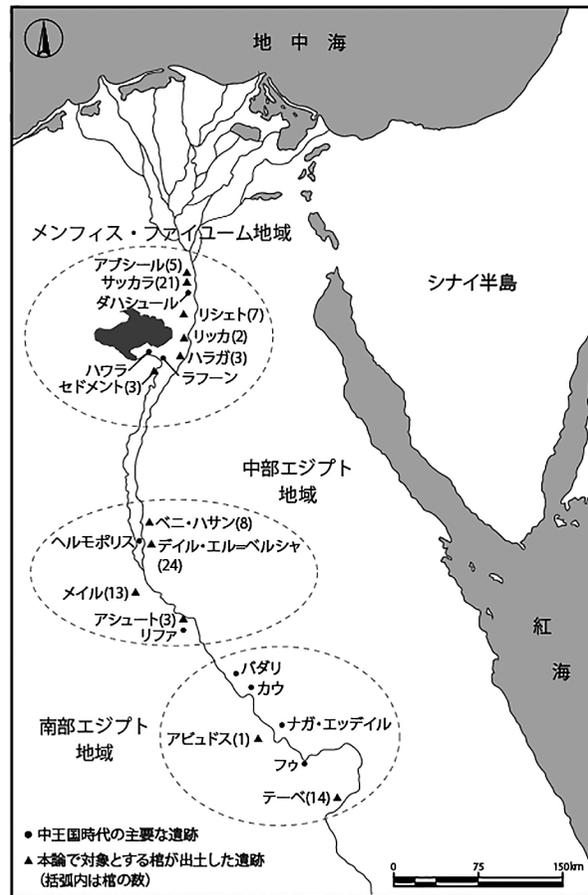


図2. 本論で対象とする棺が出土した遺跡と中王国時代の主要遺跡

(19) 対象とした棺（と埋葬室）は、Ab1Le, Ab2Le, Ab1X, Ab2X, Sq13C, Sq1Be, Sq3C, Sq9Sq, Sq4C, Sq5C, Sq6C, Sq9C, Sq11C, Sq12C, Sq1Ch, Sq3Sq, Sq4Sq, Sq6Sq, Sq1X, Sq2X, Sq7X, Sq10X, Sq36X, L4X, Ha1Ha, Ha2Ha, Sid2X, Sid3X, Sid1Sid, BH1C, BH3C, BH5C, BH1L, BH2L, B3C, B4C, B6C, B1Bo, B2Bo, B3Bo, B4Bo, M3C, M5C, M6C, M37C, S10C, S14C, S18C, T1C, T2C, T9C, T1L, T1NY, TT240, TT311, TT319である。棺には、出土地名および現在の所蔵地名の頭文字と通し番号から成る記号が与えられている。各棺の詳細は Willems 2014: 230-315を参照されたい。

(20) Willems 2014: 136-138.

(21) Willems 1988: 201.

列や属する儀礼の種類から、儀礼の構成と手順を復元する。

分析の結果⁽²²⁾、まず「王権の象徴奉献儀礼」に属する器物の描写は中部エジプトのメイル遺跡出土の1点(M37C)とアシュート遺跡出土の2点(S10C, S14C)にのみ見られた。したがって、この儀礼はオブジェクト・フリーズ第1段階で執行された器物奉献儀礼を構成する主要な要素ではなかったことが分かる。この時期の器物奉献儀礼で最初に捧げられるのは襟飾りなど「私的器物奉献儀礼」に属する器物である。ピラミッド・テキストには見られない当該儀礼に属する器物は、1点の棺を除き全ての対象棺で確認された⁽²³⁾。とりわけ襟飾り、その錘、幅広腕輪・足輪の描写頻度が高い。セドメント遺跡出土の棺Sid1Sidに描かれたオブジェクト・フリーズでは、「墓地の装飾品に関すること(=儀礼的行為⁽²⁴⁾)のはじまり」というテキストに続いて器物が描かれており⁽²⁵⁾、枕や鏡といった日用品とともに襟飾りなどの装身具が冒頭に配列されている⁽²⁶⁾。このことから、当該期の器物奉献儀礼では最初に「私的器物奉献儀礼」を行うような手順になっていたと考えられる。「王族の器物奉献儀礼」に属する器物は、通常「私的器物奉献儀礼」の後に配列されている。「王族の器物奉献儀礼」は第2段階のオブジェクト・フリーズで頻繁に描かれたと言われ⁽²⁷⁾、たしかに第1段階のオブジェクト・フリーズにおける描写頻度は低い。そのような中、メンフィス・ファイユーム地域のサッカラ、中部エジプトのベニ・ハサンやデル・エル＝ベルシャ、メイル、南部エジプトのテーベから出土した棺には「王族の器物奉献儀礼」を意図した器物の描写が確認された⁽²⁸⁾。ただし、ビーズエプロンなどの衣装供物の描写は中部エジプトに集中しているほか、杖類供物に含まれる器物の種類はピラミッド・テキストと比べると省略や順序の入れ替え⁽²⁹⁾などが見られた。武器供物に関しても弓矢は頻繁に描かれたが弓弦の描写は低かったことに加え、奉献の順序も個体差が大きく杖類供物との前後関係は不明瞭で

(22) 紙幅の関係上、3-(2)と3-(3)のオブジェクト・フリーズに関するより詳しい描写傾向の分析は山崎 2022を参照されたい。本論は各時期の儀礼構造の説明を主とする。

(23) 「私的器物奉献儀礼」に含まれる器物の描写が確認されなかったのは、サッカラから出土した棺Sq9Sqのみであった。また、この棺は部分的にしか現存していないため、本来は描写が存在した可能性も考えられる。

(24) ウィレムスは「装飾品に関すること」を具体的な装飾品を指し示すと同時に、それらを死者に捧げる儀礼的行為自体も表していると指摘している(Willems 1988: 201; 山崎 2024: 3, n.4)。

(25) Willems 1988: 200-201.

(26) Petrie and Brunton 1924: pl. XVIII. 「私的器物奉献儀礼」に属する器物の種類は非常に多岐に渡るため本論ではとくに描写頻度の高い装身具類に限定しているが、枕や鏡といった日用品も当該儀礼に属する器物である(Willems 1988: Table 13)。

(27) Willems 1988: 225-227, Table 13.

(28) たとえば、杖類供物が3種類以上描写された棺として以下23点の棺(と埋葬室)が挙げられる。Sq3C, Sq9Sq, Sq6C, Sq9C, Sq1Ch, Sq4Sq, Sq6Sq, Sq2X, Sq36X, BH5C, BH1L, BH2L, B4C, B6C, B1Bo, M3C, M6C, M37C, S10C, S14C, T1C, TT240, TT311。

(29) 各棺に描かれたオブジェクト・フリーズには個体差が見られ、捧げられる杖類供物の一定の順序を復元することは困難であった。図3に示した杖類供物の順序はこうした状況のなかで比較的頻繁に見られた器物の配列を参考にしてしている。

あった。

以上を踏まえると、当該期の器物奉獻儀礼の構造は図3のように表すことができる。「王権の象徴奉獻儀礼」の省略と「私的器物奉獻儀礼」の埋め込み、「王族の器物奉獻儀礼」に属する杖類供物の種類の省略や奉獻順序の入れ替えといった要素がピラミッド・テキストとのちがいを生み出していると言える。

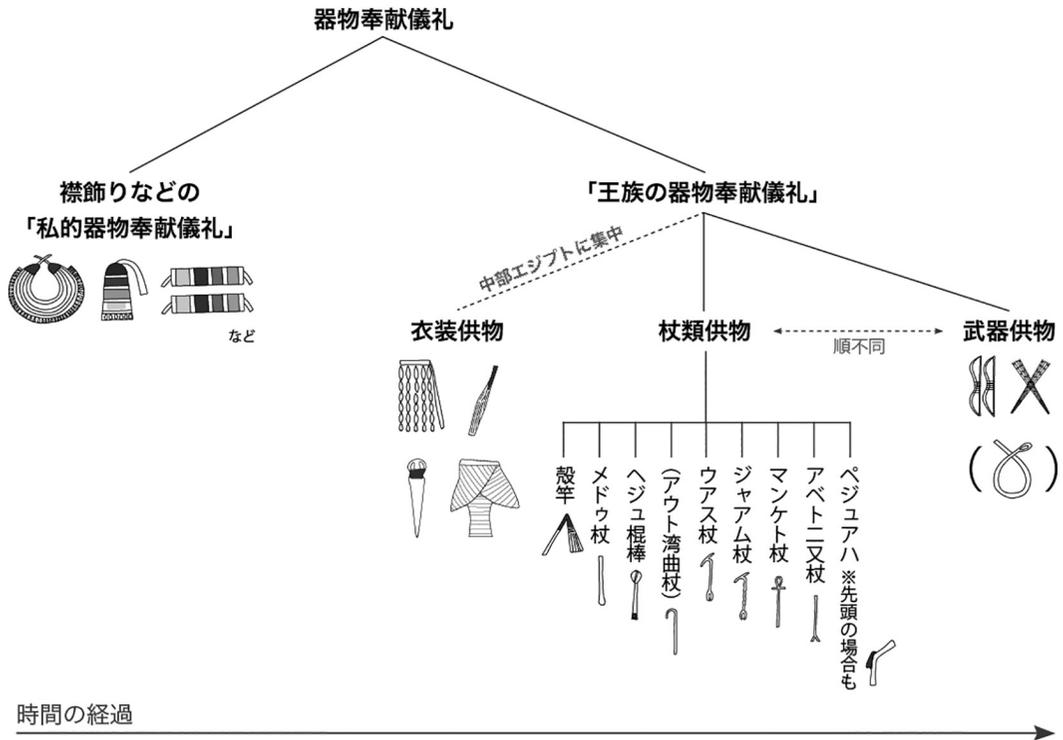


図3. 中王国時代初頭のオブジェクト・フリーズ第1段階における器物奉獻儀礼の構造

(3) オブジェクト・フリーズ第2段階における儀礼構造

アメンエムハト2世治世以降になると、箱形棺内面の胸側面にもオブジェクト・フリーズが描かれる第2段階を迎える。ここでは、図2に示した遺跡出土のアメンエムハト2世治世以降の中王国時代前期に年代付けられるオブジェクト・フリーズが確認された41点の棺を対象とする⁽³⁰⁾。第1段階と同様の検討を行った結果、図4のような儀礼構造が復元された。

まず、オブジェクト・フリーズ第1段階と異なる点として、「私的器物奉獻儀礼」の前に「王

(30) 対象とした棺は、Sq1C, Sq2C, Sq7C, L3Li, L4Li, L1NY, L1X, L12X, X5, Ha2X, BH4C, BH1Liv, BH1Br, B1C, B5C, B7C, B9C, B10C, B12C, B13C, B15C, B16C, B17C, B20C, B1L, B2L, B3L, B4L, B1P, B2P, M1Be, M1C, M2C, M4C, M7C, M8C, M1Lei, M1NY, Aby1Ph, T2L, T3Lである。

また、オブジェクト・フリーズ第1段階に中部エジプトに集中していた要素（＝「王族の器物奉獻儀礼」の衣装供物の一部）がオブジェクト・フリーズ第2段階には他地域にも広まった一方、今度はさらに異なる要素（＝「王権の象徴奉獻儀礼」）が中部エジプトに限定的になる傾向が見出された点も大きな変化である。

(4) 実際の器物を用いた中王国時代後期における儀礼構造

最後に、オブジェクト・フリーズがほぼ姿を消し実物を用いた器物奉獻儀礼が行われた中王国時代後期の様相を検討したい。オブジェクト・フリーズと比較すると、実物を使ってこの儀礼を執行できた被葬者は社会的地位の高い者に限定的であった。なかでも、王族などとくに社会的地位の高い被葬者の墓では棺内に加え棺の外にも器物が配列された⁽³¹⁾。ここでは、山崎 2021において行った考古資料を用いた分析をもとに⁽³²⁾、中王国時代後期における器物奉獻儀礼の構造を可能な限り復元した（図5）。

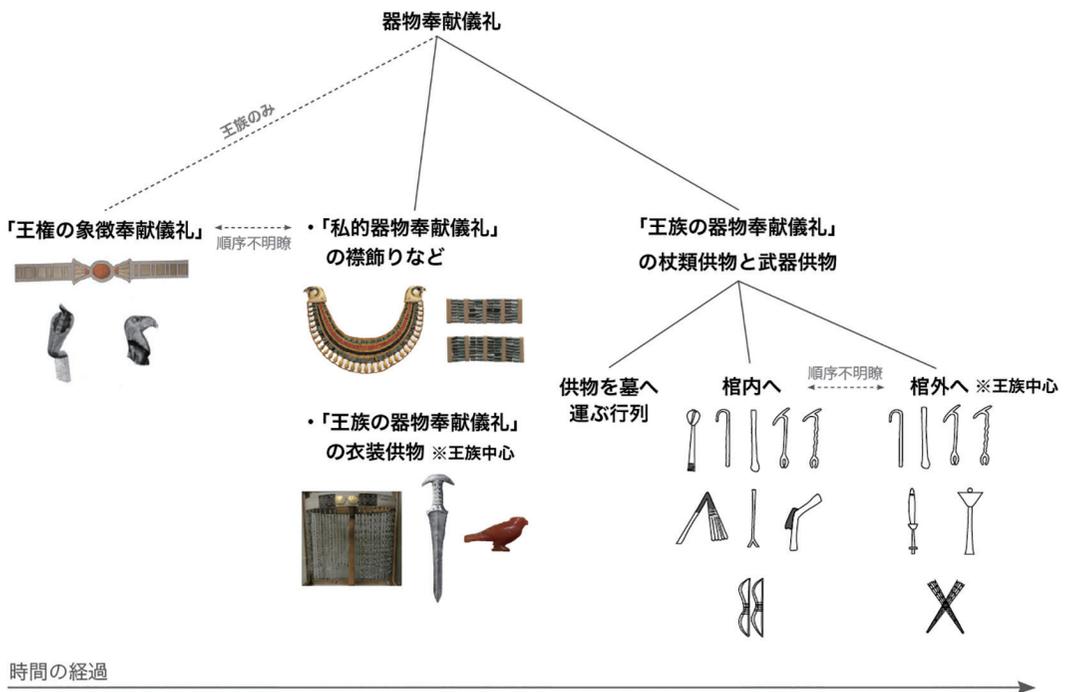


図5. 中王国時代後期の実物を用いた器物奉獻儀礼の構造

(31) 山崎 2021: 12.

(32) 山崎 2021: 9-13における分析をおもに参照する。

考古資料からは、器物1点1点の捧げられた順序まで復元することは難しい。ただし、装身具類はミイラ包みに入れられるため、遺体が棺に納められ埋葬室に運ばれるよりも前に捧げられたことは確かである。図5を全体的に見ると、「王権の象徴奉献儀礼」の存在や杖類供物の種類などからオブジェクト・フリーズ第2段階の儀礼構造をある程度引き継いでいると言える。ただし、「王族の器物奉献儀礼」の衣装供物がミイラ包みに入れられるという現実的な側面に合わせて、儀礼の手順にも変化が起きている。すなわち、衣装供物が死者のミイラ化の段階で捧げられた後に杖類供物と武器供物を墓へ運ぶ手順がくることになり、「王族の器物奉献儀礼」という一連の儀礼的行為に中断が生まれているのである。また、「王権の象徴奉献儀礼」に関しては、オブジェクト・フリーズ第2段階では中部エジプトで集中的に取り入れられていたが、当該期には王族に限定的になるという変化もみられる。さらに、棺外への器物の配置も王族を中心とするとくに社会的地位の高い被葬者に対して行われたが、器物の種類を見てみると、弓は棺内で矢は棺外、梨形棍棒頭のヘジュ棍棒は棺内で円錐形棍棒頭のメヌウ棍棒は棺外、というようにセット関係にある器物が意図的に棺内外に分けて配列されていた様子が窺える。こうした器物の配列は実際の儀礼行為を反映しており、儀礼の手順にもオブジェクト・フリーズから何らかの変化があったことが考えられる⁽³³⁾。

このように、中王国時代後期の実物を用いた器物奉献儀礼の構造はオブジェクト・フリーズ第2段階と部分的に共通しているが、現実に合わせて手順の調整や中部エジプトから王族中心になる要素が現れるといった変化がみられた。そして、とくに大きな変化は供物を墓に運ぶ行列という手順が生まれたことである。実物を用いる儀礼へと変化したことで、ミイラ包みに入れられることのない杖類や武器などは葬儀の最終段階で墓に運び入れられることになる。これは上述の通り「王族の器物奉献儀礼」に中断が生まれただけでなく、葬儀の参加者に見せる儀礼という性格を帯びることも意味する。棺の内面に描かれたオブジェクト・フリーズとは異なり、周囲に見せるという新たな要素が儀礼の手順に加わったのである。したがって、当該期の器物奉献儀礼では、中部エジプトに集中していた要素が王族に限定的になるという点に加え、儀礼の中断、器物の種類による捧げる段階の意図的な区別、そして周囲に見せる儀礼化という新たな要素がオブジェクト・フリーズ第2段階とのちがいを生じさせていると言える。

おわりに：エジプト学における儀礼研究の展望

本論では、ヘイズによる提唱を念頭に、器物奉献儀礼の構造に関する通時的変化の説明を試みた。その結果、各時期における儀礼の構成や手順が、とりわけ前段階といかに異なっているのか

(33) 明確な順序は不明瞭ではあるが、棺内と棺外に二度に渡って器物が捧げられたことは確かであり、各段階で捧げる器物の種類にも注意が払われていたと言える。

をある程度明らかにすることができた。また、各時期の儀礼構造の相違を生み出す要因として、省略・埋め込み・復古といった規則を抽出することにより、従来よりも具体的な儀礼の説明が可能となった。一方で、ヘイズの方法論を適用するには資料的制約があることも明らかとなった。たとえば、今回扱った資料では儀礼の細部にわたる手順を解明することが困難な場合があり、加えて資料ごとの個体差が問題として浮上した。今後は、資料群から一律の傾向を導くだけではなく、むしろ個別事例として分析することで、被葬者ごとに執行された器物奉獻儀礼の構造とその差異を検討する方向性も考えられよう。

また、ヘイズは言及していないが、今後は儀礼構造の分析だけに留まらず、構造が変化する背景まで考察すべきである。儀礼は社会的・経済的行為としても位置付けられるが、従来のエジプト学では専ら精神文化の枠内で理解されてきた。今後は、儀礼と同時代社会との関係や相互作用も視野に入れるべきである。儀礼は社会的必要に応じて再構築される戦略的实践でもある以上⁽³⁴⁾、儀礼の構造と戦略的实践の双方を検討することによって、当時の社会における儀礼の実態をより具体的に説明できると考えられる。

引用文献

- Cooney, K. M. 2010 Gender Transformation in Death: A Case Study of Coffins from Ramesside Period Egypt. *Near Eastern Archaeology* 73/4: 224-237.
- Geisen, C. 2018 *A Commemoration Ritual for Senwosret I: P. BM EA 10610.1-5/P. Ramesseum B (Ramesseum Dramatic Papyrus)*, New Haven.
- Hays, H. 2013 The End of Rites of Passage and a Start with Ritual Syntax in Ancient Egypt. *RSO Supplemento 2*: 165-186.
- Jéquier, G. 1933 *Les Pyramides des reines Neit et Apouit*, Cairo.
- Jéquier, G. 1936 *Le Monument Funéraire de Pepi II, vol. I: Le Tombeau Royal*, Cairo.
- Petrie, W. M. F. and G. Brunton 1924 *Sedment I*, London.
- Staal, F. 1979 The Meaninglessness of Ritual. *Numen* 26: 2-22.
- Staal, F. 1990 *Rules without Meaning. Ritual, Mantras and the Human Sciences*, New York.
- Willems, H. 1988 *Chest of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom Standard Class Coffins*, Leiden.
- Willems, H. 1996 *The Coffin of Heqata (Cairo JdE 36418): A Case Study of Egyptian Funerary Culture of the Early Middle Kingdom*, Leuven.
- Willems, H. 2014 *Historical and Archaeological Aspects of Egyptian Funerary Culture: Religious Ideas and Ritual Practice in Middle Kingdom Elite Cemeteries*, Leiden.
- キャサリン・バル (木村敏明、早川敦訳) 2017 『儀礼学概論』 仏教出版。
- 山崎世理愛 2021 「エジプト中王国時代における供物儀礼の戦略的实践：『王族の器物奉獻儀礼』 行為とその思想的背景」『オリエント』 64/1: 1-16
- 山崎世理愛 2022 「エジプト中王国時代における器物奉獻儀礼の変容とその社会的背景」『オリエント』 65/1: 1-17
- 山崎世理愛 2024 「エジプト中王国時代における襟飾り奉獻儀礼の展開と思想的背景」『オリエント』 67/1: 1-16.

(34) バル 2017: 152-166.